人が対話し，支え合う「共生社会」をめざして

——研究ノート(2)少年・少女の＜悲痛な叫び＞・＜内なる言葉＞を聴き取りながら——

長　尾　演　雄

1．少年・少女たちの＜悲痛な叫び＞・＜内なる言葉＞を聴き取るための予備作業
——今日の少年・少女の生活や意識への接近枠組み——

私は，90年代初頭，臨時教育審議会『教育改革に関する第4次答申』の第1章　教育改革の必要性，第1節「改革の時代的要請」を批判的に検討しながら，青少年の成長・発達の問題や教育の問題を議論するときの理論枠組を提示し，その枠組を使って，いくつかの論文を書いてきた。例えば，「留学生に映し出された日本人の対話能力・コミュニケーション能力」（調査報告書『外国人留学生のくらしと意識に関する調査』，1993年）や「今日の学生の生活と意識の現状と教育充実・改善」（横浜市立大学論叢，第41巻第2号，1993年），「青少年の成長・発達と地域活動」（山田・長尾『共育・共生の社会理論』税務経理協会，平成５年４月）など。

しかし，その頃は，まだ，“街を浮遊する少女”も“ブルセラ・テレクラ”や“援助交際の少女”たちも私の視野には入っていなかった。世間を騒がした“オウムの事件”はまだ起きてはいなかった。“他人のことには無関心である”と思われていた今日の若者たちが１日２万人，僅か３ヶ月で

115万人も大挙して阪神大震災のボランティア活動に参加するようなことも，そしてまた，“薬害エイズの被害者を支える会”の若者たちが3,500人も集まって，厚生省を“人間の鎖”で包囲する姿を見る機会も，私は持っことはなかった。ましてや，神戸・須磨区の少年Aが語る「透明な存在」の生活や意識を，＜キレる＞・＜ムカツク＞子供たちの生活を視野に入れた議論を意識的に展開し得るはずもなかった。

そこで，まずはじめに私が90代初頭に理論枠組としていたものを，その後に顕在化してきた少年・少女をめぐる社会現象や少年・少女が引き起こした事件に照らし合わせる作業を通して，検証してみなければならないと考えている。

その作業は，さきの答申が提示していた「成熟化の進展」「科学技術の進展」「国際化の進展」というメガトレンドに関する議論を，10数年の事態の経過の中で，検証してみる作業にもなると私は考えている。

私が，当時提示していた理論枠組は，大筋つぎのようなものであった。

子育て・教育の今日的条件はどのようなものになっていて，青少年たちの成長・発達にとっていま何が切実で最も緊急に求められているのかを明らかにしようとするのであれば，今日の青少年の成育過程にみられる顕著な特徴をつぎのように描くことである，と私は考えている。

今日の青少年たちの成育過程とその親たちのそれとを比較して，浮かび上がってくる顕著な特徴の一つはつぎのような点である。

経済の今日のような発展や国際化の進展と交通・通信手段の発達は，世界中の人々と地球上の資源とを広く深く結びつけて，国際社会がますますその相互依存を強め，その意味で，地球は急速に小さくなってきたと云わなければならない。しかし，このような経済の飛躍的な発展と国際化の進展，科学技術の発展・情報化の進展や社会の近代化の進展は，豊かな商品，

電化製品・情報機器やブランド商品に囲まれた「近代化された生活」を私たちにもたらした。そして，「消費は美徳である」という生活意識を生み出した。ところが，こうした事態の進行は，これまでの家族共同体や地域共同体の機能を衰させ，そこでの人々の結びつきを弱くし，人間関係を希薄なものにしてきた。

今日の青少年たちが取り結んでいる人間関係・社会関係のうちで，「商品や物・情報を媒介にして取り結ぶ人間関係・社会関係（間接的な人間関係・社会関係）」は，ますます肥大化してくるだけではなく，それは地球規模に拡大してきている。衣・食・住という私たちの経済（物質）生活は地球規模で世界中の人々と資源とに深く結びつくことになり，一言で云えば，私たちの生活が，諸外国に強く依存するようになってきていると云はなければならない。

しかしながら，こうした事態の進展の一方で，子供や青少年たちの地域での遊び集団は衰退し，解体してきている。かつて，地域にあった子供集団や地域の行事を担っていた青少年組織は解体し，それに加えて少子化などによって，今日の子供や青少年の「異年齢集団」＝「生活圏・親密圏共同体」，いわゆる“こどもの世界”は，ほぼ消滅し，子供同士が対話し，心を通い合わす，面接して取り結ぶ，具体的な人間関係は非常に希薄なものになってきている。

こうしたなかで，当然のこととして，今日の青少年たちの体験は，「等身大の直接的体験」は少なくなる一方，他方では「マス・メディアによる地球大の間接体験」はますます多くなってきている。ところが，私たちの生活は地球規模の，しかも強い相互依存の関係の中で成り立っていることも，そしてまた，私たちの日頃の“飽食”の生活が世界の中でのどのような関係からもたらされてきているのかも，私たちの日頃の生活体験それ自体は，私たちの意識になかなかのぼらせない。私たちの“飽食”の生活経

験と地球上に現存する“飢餓”の生活とが，意識的につき合わされ，両者が関連づけられて，討論し対話するような場面にでも，私たちが居合わせない限り，残念ながら，私たちは世界の現状に対する問題関心も現状認識も深めることができない。それどころか，ますます無関心にさせられ，感覚的にも理論的にも，諸外国の状況や，諸外国と私たちの生活との関連についての認識はいっそう貧困化してきているように思われてならない。

地球上で，今起きている“戦争”や“飢餓”についても，民族や人民の“抑圧”などの事件についても，それらの情報を茶の間にいながらにして，私たちは入手できるようになった。しかし，私たちはそれらの出来事が私たちとは遠い世界の出来事であり，私たちとは無関係なものとして，受け止めてしまうことがよくある。こうした出来事を，人間的な怒りや悲しみをもって，心を動かして受け止め，そしてその真相を私たちが，しっかり認識していくためには，私たちが暮らしている日常の人間関係や親密な生活圏の中に人間的な悲しみや痛みを分かち合えるような土壌を持って居ることが不可欠であるいうことを，いくつもの出来事の中で，いやと云うほど痛感させられてきている。

社会問題や社会的な出来事への青少年たちの今日的な無関心の問題の核心は，ここら辺りに在ると捉えて，まず間違いないと私は考えている。

つぎの点も際だった特徴の一つである。

それは，学歴社会がつくりあげられ，受験体制が確立してきているということである。今日の子供たちは学校の中に「囲い込まれ」てしまっている。さらに云えば，社会全体に学校的な評価尺度が浸透してきたということである。

そのことは，子供たちから遊び時間が取り上げられ，遊び集団が解体し，彼らの「異年齢集団」の解体に拍車をかけることになった。そして，今日の青少年たちにとっては，「他人」はみんな競争相手であり，みんなと何

かを「共同で成し遂げた時の感動」を体験することが非常に稀になった。

また，そのことは，子供たちが受験勉強に忙しいというだけでなく，プロセスよりは成果を尊重する態度を子供たちが身につけ，その態度が学校教育の中で広く見られるようになった。じっくり考え，思考力を養うというよりは，短時間に多くの問題を手際よく解くという能率主義・効率主義が子供たちの世界のなかに深く浸透してきたということである。そして，子供たちはいつもなにかに急かされて，友達と向きになって議論し，対話して共に遊び,生活する時間と場面を持つことがほとんどできなくなった。そうした生活の中には，激論してでも自分の気持ちを通じさせるような人間関係を忍耐強く作り上げる苦労も煩わしさも必要としないが，しかしそこには異質な他者と対話し，心触れ合う人間関係を取り結ぶ喜びもなければ，対話し，心ふれ合う人間関係を取り結ぶ訓練も，そうした能力を発展させる機会もないということになる。

今日の青少年たちの対話能力・コミュニケーション能力の問題は，見過ごすことができないところにまできていると私は考えている。

このようにみてくると，今日の青少年たちは，人類がこれまで経験したこともない新しい条件のなかで生活し，そうした条件の中で成長・発達を遂げていかなければならないということが明らかになってくる。子供たちが置かれている今日の条件をしっかりと踏まえ，人々の成長・発達の今日的な筋道を明確にして，そして，それに見合った子育て，教育の在り方が忍耐強くしかも丹念に模索されて，それが確立されるならば，今日の子供たちは，これまでとは違った，飛躍的な成長・発達の可能性を秘めていると捉えておかなければならないということになる。

今日の少年・少女たちの目を覆いたくなるような問題行動や非行の背後に，彼らの今日的な成長・発達の可能性が秘められていることを見落とさない問題関心と態度が極めて大切なこととして，大人に，殊に研究者や教

育関係者に求められてきていると私は考えている。

これまでの議論が，90年代初頭に，私が提示していた枠組，「青少年の生活と意識をしっかりと認識し，彼らの成長・発達の問題や教育問題にアプローチする」私の理論枠組の大筋である。

それではここで，その後に続出した青少年をめぐる出来事を踏まえて，少し立ち入った検討に進むことにする。

はじめに取り上げたい問題は，ブルセラ，テレクラ・援助交際の問題である。

女子高校生たちの多種多様な取材や聴き取り調査を精力的に行い，そのデータを豊富に持ち，こうした問題で旺盛な発言してきている，宮台真司の書物を読んでみると，それが書かれた時期によって議論の仕方には違いが見られるが，しかしながら，彼の議論の骨子になっているものは，大筋で，つぎのようなものになると私は読み取る。

日本における都市化・郊外化（＝家族共同体・地域共同体の空洞化）の進展という新たな社会状況を，宮台は成熟社会の形成と捉える。そしてこの成熟化社会は，学校的価値が重視され，その価値が社会全体を貫くようになた社会のことであり，それは学校化社会の形成であると言う。今日の青少年たち，殊に女子高校生たちは，この成熟社会の中で，自己を肯定し，承認してくれる「居場所」をどこにも持つことができなくなってきた。別な言葉で言えば，成熟社会には，コミュニケーション・チャンスを失った「宙ぶらりん」の女子高校生たちが大量に創り出された。しかし，コミュニケーションは，人間にとって，なくてはならないものであり，人間の本源的な欲求であるが，この“コミュニケーション（交わり）欲求”を満たすための「居場所」探しが，女子高生たちのテレクラ・援助交際であると彼は捉えている。いま，本当に必要なことは，道徳的な説教を語ることではなくて，新たな社会状態がもたらす危険を直視し，現実的かつ論理的に

考える姿勢であり，＜倫理から論理へ＞の姿勢である，と強調する。

一言で言えば，ブルセラ，テレクラ・援助交際の女子高生たちの核心的な問題は，コミュニケーション・スキルの問題であり，コミュニケーション・チャンスの問題であり，人間のコミュニケーション欲求の問題である，と彼は述べるのである。(『制服少女たちの選択』，講談社，1994年。『学校を救済せよ』，学陽書房，1998年。『世紀末の作法』，リクルート・ダヴィンチ編集部，1998年，など参照)。

彼の議論の骨子を以上のように整理すれば（少し整然と整理しすぎているように思えないでもないが)，その議論の骨子は，私が提示しておいた理論枠組と重なる部分が多くあることが分かる。と同時に，私の理論枠組がブルセラ・テレクラ・援助交際という少女たちへの接近枠組みとして有効であることが明らかにされていると言えるように思う。

今日の青少年たちを理解しようとする時に，「オウム事件」でよく言われた「学歴が高い青年」たちや分別あるはずの「いい大人」たちが，なぜ「オウム教団」に惹かれたのか，また，社会的にこれほど批判されているにもかかわらず，なぜいまだにこれほどに惹かれているのかということが，不可解でならない。

私のここでの問題意識と課題に引きつける形で，「オウム」の問題にも少し立ち入っておかなければならない。

村上春樹が，オウム真理教の信者（元信者）の気持ちや思いや主張を聴き取り，それを書物にした『約束された場所で』（文芸春秋社）は，彼ら信者たちは社会の中に，自分たちの「居場所」を見出せず，コミュニケーションの相手をこの社会ではなく，教団の生活のなかにしか見出せず，教団とそこでの生活のなかで人間的な交流，コミュニケーションをはじめて取れた青年たちの姿を伝えている。

また，中村行秀は，「オウムの問題」についての宮台の議論に批判的に

ふれながら，「『終わりなき日常』と述べられている社会状況は，現代日本社会の管理体制であり，能力主義の競争秩序であり，そこからくる閉塞感，自己喪失感である。こうした「現実」が彼ら（オウム真理教の信者たち＝長尾）にとってどうにもならない強固なものであればあるほど，彼らは自分にとっての「もう一つの現実」「虚構の現実」（教団の生活・世界＝長尾）で生きようとする。自分の居場所がなくなった現実から，居場所を求めて＜現実＞（教団の世界＝長尾）へ，現実がつまらないから＜現実＞へという感覚。生の有限性と時間の一回性を受け入れて，傷つくことを恐れずに生きることが，決して「退屈で」「つまらない」生き方ではないという方向に，生活を現実的に変えるように励ますことこそ，今必要」なことであると，言う。（中村行秀「虚構と現実のスイッチ」，中村行秀他編『離脱願望』，労旬報社，1996年）。

この問題で，もう一つだけ引用しておこう。

先ほどの村上春樹の書物に，オウム信者の聴き取りを終えた村上が河合隼雄と対談しているが，その対談の中で，村上は「『この人は世間でうまくやっていけないだろうなあ』という人が明らかにいますよ。一般社会の価値観とはもともと完全にずれてしまっている。それが人口の中に何パーセントくらいなのかは知らないけれど，良くも悪くも社会システムのなかではやっていけないという人たちが存在していることは確かだと思うんです。そういう人たちを引き受ける受け皿みたいなものがあっていいんじゃないかと僕は思います」と述べている。この村上の発言を受けて，河合はつぎのよう言う。

「それは村上さんの云っておられることの中で僕が一番賛成しているところです。つまり社会が健全に生きていると云うことは，そういう人たちのいるポジションがあるということなんです。それをね，みんな間違って考えて，そういう人たちを排除すれば，社会は健全に成ると思っている。

これは大間違いです。そういった場所が今の社会にはなさすぎます」，と（前掲書，236-237ページ）。

この両氏の発言には，これからの社会のあり方やここでの課題である「共生社会」の在り方を考察する上でじつに示唆に富むものがあると，私は理解している。

つぎの点に進もう。

阪神大震災の援助活動で青少年たちが見せた，あの“ボランティア活動”は，今日の青少年たちの意識や生き方を語るときには，どうしても見落とすことができない。あの時のボランチア活動を称して，“ボランティア元年”と呼ばれているが，それは，僅か3ヶ月の間に延べ115万人という大勢のボランティアが被災地の至る所で“住民と助け合い活動”を行ったということだけでなく，この度の“災害ボランティア”たちが，新しい援助の思想を作りつつあるという面から見ても，まさに“ボランティア元年”と呼ばれるのであると，野田正彰は云う。野田は，つぎのように述べる。

「阪神大震災の援助活動を通して『災害ボランティア』たちは，新しい思想をつくりつつある。被災者は必ずしも弱者でなかったこと，被災者のなかから自助と自治の動きがあり，被災地内の地域ボランティア活動が盛んに行われたことにより，援助者から被災者への一方的援助の関係は，問い直された。ボランティアたちははじめて，『してあげる人』ではなく，被災者と対話する人，被災者の傍らにいる人になった。おにぎりや熱いトン汁に心を添えるのではなく，心の交流に物やサービスを添えることが問われた。ボランティアは，援助には体力や時間以上に，他者への理解と創意がいることに気づき始めた」と（『災害援助』，岩波新書，75-76ページ）。

志田昇のつぎの議論も紹介しておきたい。

「現在の青少年には，人生に意味を与えてくれる家庭や地域はもはや存在していない。しかも学校では，周りの人間は競争相手であり，敵でさえ

ある。さまざまなボランティアに若者が参加するのは，自分たちがそこでは他人に必要とされ，頼りにされているからではないだろうか」と（志田「新人類と団塊ジュニアの狭間」，『離脱願望』，前掲書，112ページ）。

このように見てくると，ここでも先ほどから問題にしてきている“コミュニケーション欲求”・“社交性欲求”の問題が明らかになってきている，と私は考える。

そうすると，今日の青少年たちに接近したり，彼らが引き起こす諸問題を考察する際に，どうしても念頭におかなければならない問題に，彼らの“コミュニケーションの問題”，もう少し具体的に言っておくと，彼らの“コミュニケーション欲求の問題”，その発現の条件や形態やスキルの問題，コミュニケーション欲求実現の機会や場所の問題などがあることが明らかになろう。

ここまでくると，学校も家族も地域も相似形となり，「余白」のない社会に「ムカツキ」，それが高ずると，子供たちが閉塞的・管理社会的な人間関係を断ち切りたいという「キレる」意識を強く抱くのも理解できないことではない（西山明編『少年漂流記』共同通信社，参照）。

少年・少女の“悲痛な叫び”・“内なる言葉”を聴き取るための，いまの私にできる予備作業はここまでである。

2．少年Aの“悲痛な叫び”をどのように聴きとればよいのか

神戸須磨区の 少年Aの弁護団長を務めた野口善国弁護士は、少年Aの内面に肉薄し，彼を正しく理解し，その更正を図る道筋を明らかしたいという苦悩の一端を『それでも少年を罰しますか』(野口善国著，共同通信社)で語っている。

野口弁護士は，「感情を表さない」，「何も欲しがらない」，「父母に会い

たくないと言う」少年Aの心の奥の声をを正しく聴き取りたいと悪戦苦闘している。「感情を表さない」少年Aの姿に，心の奥底に激しい感情が渦巻いており，それと闘っているからこそ，あまり外へ関心が向かないのではないかと野口は推察する。「何も欲しがらない」少年Aに何回接見しても，だからといって本当に彼に何の欲求もないとは，野口は考えない。一般に少年の犯した非行は，やはり少年の何らかの欲求に基づいて行われたものと言えるし，少年Aの事件の内容からみて，少年Aの欲求はかなり強烈なものと考えなければならないだろう，と野口は推察する。少年Aの「父母に会いたくない」という感情，「親に対する拒否的」感情は，心の奥で両親の愛を求めていて，それが満たされないことからきているのではないかと，野口は考えた。

こうした少年Aへの弁護団の対応と理解の姿勢には，少年問題に長年取り組んできた経験から，「少年が非行に走る原因は直接的には両親の適切な愛情を受けられなかったことであり，間接的には地域，学校，文化，経済などの社会的要因がさまざまに絡み合っているという彼等の考え方・姿勢が反映されている。

少し詳しく，彼らの仕事を辿っておこう。

少年Aの事件のもっとも根本的な問題は，少年Aが愛されているという感情をもてなかったことである，と彼らは言う。

• 両親に少年Aに対する愛情がなかったということではない。しかし，問題は，少年Aが育った家庭の状況を抜きには考えられない。少年Aの父は僻地と言うべき村の中学を卒業後，阪神間に出て工員として働いた。数年後，大手の企業に就職でき，誠実さと努力によって，彼の学歴を考慮すれば，まずまずの地位に昇進している。少年Aの母は，母方の祖父が少年Aの父と同郷である。阪神間で生まれ，高校を卒業後，事務員として働くが，結婚後は専業主婦。少年Aの母は，小学校の時，父が亡くなり，女手一つ

で育てられた。

• 少年Aは長男として生まれ，両親に大変期待され，厳しく育てられた。母は少年Aが幼稚園に入る前から，「幼稚園に行っても恥ずかしくないように」と，はしの使い方や衣服の着換えをくり返し教えた。父は仕事が忙しいこともあって，多くのサラリーマンと同様，家族とともに食事をすることもまれで，少年Aと頻繁に接することはなかったようだ。少年Aの言によれば，時々殴られていたようだ。母は自分で「うちはスパルタ教育です」と述べているように，ときには体罰をふるい厳しくしつけをおこなっていた。しかし，いわゆる児童虐待のような暴力はなかったようである。

• このように，両親は少年Aに愛情を感じていなかったわけではなく，むしろ長男として期待をかけるあまり，厳しく接していた。母は，「他人に負けられぬ，他人に笑われたくない」という意識が強かったと想像できる。母は，人生を生きぬくためには闘争心が必要であると信じており，子どもたちもそれを認めていた。

• 少年Aはかなり繊細な神経の持ち主である。傷つきやすい弱い子であった。

• 繊細な・傷つきやすい少年Aから見れば，少年Aに対して行われたしつけはあまりに厳しすぎた。その結果，少年Aは母から愛されているという感じを持つことができなかった。ただ叱られるのが怖くて指示にしたがっていたようである。母は，少年Aの心の繊細さに十分に気づかなかたようで，少年Aを「甘えない子」と思っていたが，「ぐずな子」・「すぐ泣くが強情なところのある子」と評価もしていたところがある。

少年Aが通っていた小学校も中学校も神戸市の住宅地域の標準的な学校である。神戸市はいわゆる私立の名門進学校の中学受験競争が激しいことで知られている。また，公立高校の格差が強く意識されているところである。

・少年Aだけが学校において特に不当に取り扱われたという点は見出しがたいが，少年Aが「小学校高学年になると自分は学校とかみあわないと感じた」と述べていることは理解できる。

少年Aが住んでいる地域は，私にはかなり特殊な雰囲気のあるところに感じられた。行ってみて気づくのは，まず住宅密集地であるのに，人がほとんど歩いていないし，子どもが外で遊んでいないことである。

・少年Aの家の近くには「東大通り」とよばれているところがあり，一時期，少年Aの父親は東大卒という噂が，二，三キロも離れている私が住んでいる地域にまで流れた。

・このような地域の中で，少年Aの家庭は異質な存在であったかもしれないし，母親は他人の評価を気にして「恥をかかないように」とことさら少年Aを厳しくしつけたのであろう。

少年Aが母親や学校から受け入れられていない，評価されていないと感じるに至った遠因の一つは今でも根強く存在する学歴社会と厳しい受験競争である。このような競争を母親が意識していなければ，母親自身がもっとゆったりした気持ちになり，ちがった角度から少年Aの長所を見つけだし，少年Aをもっと受容することができたはずである。

・そうなれば，少年Aも自分が拒まれているとは感じなかったはずである。少年Aの親や周囲の人々が，少年Aに受験競争を勝ち抜いて生きる以外にも，すてきな生き方があると教えてやることができれば，まったく違った少年Aに育っていたかもしれない。

少年Aは自分が両親に愛されているという感じをもてなかったために，自分が愛されるに足る大切な存在だという実感を持てず，あげくに生きているという実感さえ持てなかった。自分も他人も無価値であるとしか感じられなかった少年Aは他者を殺す事によって自分をも簡単に殺したのであろう。

少年Aのこのような理解に立って，野口弁護士は少年Aの例の「透明な存在」を“現実の世の中に生きている実感を持てなかった”ということ，“自己の存在が希薄化している感じ”“居場所がなく安全が脅かされている感じ”を意味していると解釈する。

宮台真司も，少年A事件について精力的な発言をしている。第1章との繋がりもあるので，彼の議論もここで見ておくことにする。

前の章でみておいたように，テレクラ・援助交際の“浮遊する少女たち”についての宮台の議論の進め方や議論の仕方からすると，彼は，おそらく少年Aの“悲痛な叫び”をコミュニケーション欲求の叫びと捉え，当然の事として，その視点からの地域や学校や家庭の調査・分析・考察が展開されるのであろうと私は予想して，宮台の『透明な存在の不透明な悪意』（春秋社）を読んだ。

宮台は，前章で見てきた彼の理論枠組を使い，今日の「成熟社会」の“同調圧力”をキーワードにして，「縦から横からの同調圧力のなかで，中学生は透明化している。その羊化した状態のことを酒鬼薔薇は“透明な存在”と言った。僕であっても僕でなくてもいい存在。これは単に疎外されているとかいじめられているというものよりも，もっと深いことです」とか「学校で透明な存在になったとしても，それが学校のなかだけの話であれば酒鬼薔薇だってこれほど苦しまないし，酒鬼薔薇の声明文がこれほど共感を呼びはしないはずです。いまの子どもたちは，学校で透明な存在になったら，家でも地域でも透明である。それが問題」，と（前掲書35ページ，41ページ）。

繰り返しになるが，宮台が少年Aの“悲痛な叫び”を，彼のこれまでの議論の仕方からすると，少年Aの“コミュニケーション欲求”・“自己承認欲求”・“自己実現欲求”の問題と捉え，解決の方向や方策も，したがって，自己承認し合える関係，自己実現の場所，いわゆる“居場所”づくりの方

向に求めるという議論を展開するのが，至極当然のことだろうと私は予想していた。だがしかし，この予想は完全に覆された。不思議でならない。“倫理から論理へ”“道徳論から論理・理論へ”が問題解決のスタンスであるという宮台の主張に，私は問題解決のスタンスとはどのように議論を展開するときのことなのかを加えておきたい。問題を解釈するだけの議論の仕方と問題を解決しようとする議論の仕方とには質的な違いがあるということも付け加えておこう。

3．少年・少女たちの<内なる声>は何を訴えているのか

『青少年白書』（平成10年度版）は「青少年には次代の社会の担い手として期待が寄せられていますが，一方で，青少年の非行等問題行動は依然として深刻な状況にあるなど一部に憂慮すべき傾向がみられる」とし，第1部を特集にして「青少年をめぐる問題の現状と対応の基本的方向」に200ページも割いている。

青少年のナイフなどを使った殺傷事件やいじめの問題や覚せい剤やシンナーなどの薬物乱用，いわゆる援助交際などの少女売春など，少年非行の戦後第4のピークと呼ばれるような増加傾向は，子どもたちがおかれてる状況がいかに深刻なものになってきているのか，子どもたちが，どんな思いで毎日を生きなければならなくなってきているのか，子どもたちが何を大人や社会に訴えたくてそのような行動をしでかしているのだろうかを知りたいと考えている私にとっては，まず見ておかなければならないものの一つである。さらにそれは，青少年問題の今日的は深刻さを，政府筋がどのように受け止め，それにどのように対応しようとしているのかを知るための絶好の文書だと考えるからでもる。

青少年たちの非行等問題行動への対応の基本方向にしても，青少年たち

が抱えている問題の克服にしても，青少年たちの成長・発達の問題にしても，言うまでもないことだが，最終的には，青少年自身がその問題に主体的に取り組まなければならないものである。家庭，学校，地域社会が連携して青少年たちの問題行動の解決に取り組むと言っても，青少年たちの健全育成に取り組むと言っても，それは青少年たち自身がその気になり，それと真っ正面から向き合い，問題解決に意欲を持ち，それへの取組に乗り出すことを支援できるに過ぎないことを忘れないようにしたい。

別な言い方をすると，青少年たちの問題行動の克服は，問題を抱えている青少年自身がいま切実な思いや願いを実現していく過程でやっと可能になることだろうし，青少年たちの健全育成の事業が成功するのは，青少年たちが，本気になってやってみたいことを実現する方向，彼らの自己表現・自己実現欲求がよく実現される方向とその過程であると言うことができる。大人や社会がいまなににもましてしなければならないことは，このように考えれば，青少年たちが今何を切実に願い，どんな思いで生きているのかをしっかり知ることであり，彼らの願いや思いをじっくり聴き，思い切り語らせ，一つづつそれが実現することをどう支援するのかということであるだろう。

こうした観点に立てば，ここでの検討の視点は自ずと明らかになろう。

『白書』が，今日の青少年たちの切実な願いや思いをどのように捉え，その実現の支援の方向や方策を取っているのかを知るためには，『白書』が今日の青少年の姿をどのように描いているかを見ることで，明らかになると考えている。

『白書』は，今日の日本の青少年の姿をつぎのように描く。

「今日の青少年は，一般的に，物質的には豊かな環境の中で，周囲からは比較的自主性を尊重されて育ってきている。また，家庭生活，学校生活共に大部分の者は楽しいと感じており，生活に関して一般の青少年から顕

著な不満意識は表面的には見受けにくい。しかしながら，青少年の人間関係という点に着目すると，青少年自身や周囲のライフスタイルの変化等を背景に，一人で遊ぶことが多かったり，親や兄弟，教師やクラスの友人などの限られ人たち以外とは接する機会や場が少ないなど，総じて人間関係が希薄な中で日々暮らしている印象を受ける。個人の自由や個性の尊重という考え方が社会に浸透し，価値観が多様化していく中，青少年の中には，夢を追求し自己の個性や能力を磨きスポーツや芸術等の分野で世界的に活躍するような者の現れている一方，社会へのかかわりに関する自覚や公共心が相対的に低く，また，自分に対して誇りや自信をもたなかったり，多様な人間関係を築いていくことや責任，努力，困難を伴うことに対して回避的であるという傾向もうかがわれる。こうしたことに加えて，社会生活における基本的なルールを守るといった規範意識の低下傾向がみられるなど，社会の一員としての認識が希薄化しているのではないかと思われる面も見受けられる」と。

ここには，私がこれから議論していく上で注目しておきたい問題点の指摘がいくつかあり，今後の青少年への対応にとって，重要になると思われる問題点の指摘が含まれている。その点を簡単に述べるておく。

まずはじめにふれておきたい点は，青少年たちの大部分の者が「家庭生活，学校生活共に楽しいと感じており，生活に関して一般の青少年から顕著な不満意識は表面的には見受けにくい」という議論についてのコメントである。

青少年たちは，“一般の青少年”とか“ごく普通の子どもたち”という言い方に，私たち大人には理解出来ないほどの反発や抵抗を示しているということ，そして青少年たちの“表面的には見受けにくい”不満や悩みや本音をどのようにして聴き取るのかが，いま，青少年の問題を議論する際の最優先課題であると考える私にとって，ここでの議論は誠に不満である

ということである。青少年たちの本音や実像に迫る作業が，いま，やっといくつか始まっているので，すぐ後で，それを紹介しながら，青少年たちの＜内なる声＞を，青少年たちの＜本音＞を聴きとる試みをやってみたい。

二つ目は，「夢を追求し自己の個性や能力を磨きスポーツや芸術等の分野で」輝いている青少年たちと同様に，何かの分野でどの子も輝きたいという“未だ形になっていない欲求”も含めてのことだが，自己実現・自己表現欲求をもっている大勢の少年たちがいるのだろう。その点についても，ここでの議論の仕方には私は大いに不満である。

つぎの点も指摘しておきたい。

「総じて人間関係が希薄ななかで日々暮らしている」青少年たちの＜内なる声＞，「多様な人間関係を築いていく」ことを回避したり，「責任，努力，困難を伴うことに対して回避的である」青少年たちの＜本音や悩み＞，「社会の一員としての認識」が希薄化している青少年たちの＜心の叫び＞こそ聴き取らなければならなにのではないか。私は，コミュニケーション欲求は人間にとっての本源的欲求だと考えているからである。その欲求が実現しにくくなっている日々の暮らしが，今日の青少年たちの生活であるとすれば，そのことが青少年たちに悩みでないはずがないし，問題でないはずがないし，生活の不満でないはずがないと，私は捉えている。

神戸児童殺傷事件の容疑者だとして逮捕された少年の報道と同世代の少年が残酷な犯罪を犯したらしいという報道中に，中学生か高校生とおぼしき少年たちが，カメラに向かって手を振ったり，ピースサインを出しておどけている映像とに多く人々が衝撃を受けた。

逮捕された少年と，ピースサインの少年の行動心理への不安と関心に答えるには，子どもたちの意見だけで番組を作ろういう意向で出来上がった書物が『14歳・心の風景』（ＮＨＫ出版）であるという。

この書物に収められている「14歳　1,900人へのアンケート」結果のな

かで，私がもっとも注目したいものは，“中学生にとって，一番大切なもの，それは友だちである”と読み込まなければならないいくつかの調査結果である。

「悩みを相談する相手は誰ですか？」と聞かれれば，中学生たちは「友達」(65.5%)，「親」(36.5%)，「先生」(5.0%) と，中学生の10人中6～7人が「友達」と答え，ダントツである。「先生」に相談する生徒は，100人いてやっと5人という数字になっている。

「いちばん自分らしさを発揮できるところはどこですか？」と質問されると，彼らは「友達といる時」(57.4%)，「部活」(25.4%)，「家族といる時」(20.4%) などで，ここでも，中学生たちは友達を選ぶ。

学校で何が一番楽しいですかと，オープンアンサーで聞かれても，友達と話し，遊ぶときと答えている。

こういう調査結果を見ると，友だちとの関係を抜きに，今日の中学生を考えることは不可能である。友だちとの関係がうまくいくとき，彼らは「幸せ」を感じ，うまくいっていないとき「不登校」や「死」をも考えるほど悩んでしまう。“いじめ”の問題の重大さも，学校生活の満足度の問題も，彼等のこのような意識状況を念頭に入れて，はじめて理解の糸口が見つかるのだろう。いま一つは，今の中学生にとって親や教師がもっている“意味”についてよく考えてみなければならないと，いうことである。

ＮＨＫ教育テレビで，1998年４月から５/６月及び８月にかけて、計４回放送された「少年少女プロジェクト特集　ききたい　10代の言い分」に出演した中高生の声を収めた書物がある。それは『証言　10代もっと言いたい私たちのこと』(江川紹子，ＮＨＫ少年少女プロジェクト編，ＮＨＫ出版) である。毎回約20人の中高生をスタジオに呼び，テーマを決めて，子どもたちの言い分を聞くという内容。毎回約６時間にわたったが，それを２時間に編集して放送。４回目は，全国各地の中高生のもとへ出向いて，

彼らの声を取材したものを放送。延べ136人が出演し，それへの共感や反論が1,700通を超える手紙やファックスで届けられるなど，大変な反響であった。

先に見たアンケート結果との関連を考えて，まず始めに，この書物の第3章「友だち」編を見ることにする。

インタビュアーの江川さんは，ここでの聞き手としての仕事を終えた後で，「“仮面友だち”に辟易する子どもたちにも耳を傾けて」という一文を書いている。その中で，子どもたちを取り巻く人間関係の中で，最も大きな比重を占めているのが，友だちとのかかわり方のようだ。「学校・教師」編で出てきた不満や悩みも，それが友だち関係に影響を及ぼすから，よけいに深刻になるらしい。『親・家族』編でも，友だちに関する話が結構出た。特に，いじめの問題は深刻だ。友だち関係の悩みから学校に行かれなくなったり，体を壊したり，時には子どもが自ら命を断ってしまう悲劇も生じる。なのに，なぜいじめはなくならないのか。聞いてみて驚いたのは，『いじめる側』『いじめられる側』両方を体験した子どもが結構多いことだ。いじめられた経験がある人は，そのつらさが分かるから『いじめる側』にはまわらないと思っていた。確かにそういう子どももいる。でもかなりの子どもたちが，『別の人がいじめられていれば自分はいじめられない』『いじめに参加しないと，今度は自分がいじめられる』といっていた。それだけではない。いじめているうちに，ある種の快感を伴ってくるらしいのだ。『反応が面白い』『いじめられるヤツは，そういうオーラを発している』『いじめられる方に問題がある』と，カラッと言ってのける子どももいた。おそらく多くの視聴者からは反感を招いたことだろう。でも，それが『いじめる側』の本音ならば，現実は現実として受け止めなければならない。きれい事を並べてみても，子どもの本音はなかなか見えてこない。中学生のときにいじめを楽しんでいた男の子たちも，高校生になるとほと

んどいじめをしなくなったとも言っていた。どうやらそういう行為がばかばかしくなったらしい」，と（前掲書，166～167ページ参照）。

また，「友だち」をテーマにしたこの番組のディレクターである，鈴木知子さんの「いじめという人間関係とかかわりを断つ力をみにつけてほしい」の一部を紹介しよう

「リーダーを中心とするグループでのいじめは，取材の過程で実に多くの人から聞いた。『リーダーと子分・とりまき』『長と家来』など表現はさまざまだが，子分たちはリーダーに合わせて誰かをいじめていれば安全だという。もし逆らったら，今度は仲間だったはずの自分がいじめにあう。だから，例え表面的でも，リーダーには合わせているのが処世術らしい。多くの人が，一人ぼっちになることを何よりも恐れていた。そうまでして維持したい学校での人間関係とはいったい何なんだろう，と思わずにいられなかった。いじめの人間関係の中にいる人は，誰も幸せじゃない。一人でいるのはつらいし，合わせているのも本当はつらい。悪口の対象となる犠牲者をつくることでしか自分の地位を維持できないリーダーもつらい。閉塞した人間関係のがんじがらめな状況が見えてくる。なんだか暗い気持ちなってしまった。しかし，大人になっても，上司や実力者におもねて，同僚の悪口を言う人もいる。これは子どもたちの間だけの問題ではなくて，人間の普遍的な弱さなのかもしれない」，と（前掲書，173ページ）。

ここには，竹内常一が，「いまの子どもたちが「やさしさごっこ」と「いじめ」とをあわせもっているのは，そのようなやり方でしか社会をつくっていくすべを知らない」し，「かれらはおとなから共存・共生の社会をつくる知性とちからをなにひとつ教えられてこなかったために，かれらは『やさしさごっこ』と『いじめ』と未熟なやり方で，なんとか子ども社会をつくっている」（『少年期不在』（青木書店）132～133ページ参照）と言っているが，私はそのことを指摘しておく。同時に，すぐにつぎにことも重ね

ておかなければならないように私は考えている。

第１回座談会「学校・教師」が終わった後の感想文で，インタビュアーの江川さんが，つぎのように語っているのが私には，強く印象に残っている。

「子どもたちが『ふつうの子』という言葉に反発を示したことも，なるほどと思った。『みんなそれぞれ違うんだから』『ふつうって何なのか』と。何か事件があるたびに，学校は『ふつうの生徒だった』と述べ，マスコミはその通りに報じる。私たちはそれを見て，なんとなく分かったような気になってしまう。いわゆる不良でもなく，とびきりの優等生でもない，とりたてて目立つわけでもないが，周囲を心配させるほど孤立しているわけでもない……でも，そういう大人を，私たちは『ふつうの大人とは呼ばない』……子どもたちが『ちょっと待てよ』と反発するのはもっともだと思う。印象的だったのは，『まじめ』と言われるのがイヤという中川くんの発言。中井くんは『みんなともっと分かり合いたいとも言っていた。彼にとっては，『まじめ』というレッテルがある種の壁になってしまって，『まじめでない子』と自分を隔ててしまっているのが苦痛なのだろう。ポツポツと語る中井くんに，参加していた子どもたちが，それぞれの立場で理解をしようとし，結構共感を示していた。『分かり合うためにはやっぱり口に出して言おうよ』という発言をした子どももいた。私たち大人はすぐ『今の子どもは分からない』と思ってしまうけど，こうやって分かり合おうとする子どもたちがたくさんいるということが，とてもうれしかった」，と（江川紹子「子どもはまだまだ学校や先生に期待している」55～56ページ）。

大人に教えられなくても，子どもたちは共存・共生の意識・思想を学び取りつつあるように思えてならない。

そのことの論証になるように考えるので，これも引用しよう。

「親・家族」を担当した，ディレクター岡本靖明さんは「番組に出演した中高生や，アンケート，電話取材に応じてくれた10代から感じたことは，『自分を子どもではなく一人の人間としてみてほしい』という主張だった。その思いの裏側には，父親・母親を親としてではなく，自分と同じように『一人の人間』として見たいという気持ちがするように思う。10代を取材する過程で，彼らの親たちからも話を聞いた。親たちの多くがいっているのは『親として子供が何を考えているのか知りたい』ということであった。自分は親であることを常に意識していて子どもに接しようとしている。しかし，子どもは子どもとしてではなく，一人の人間としてみてほしいと考えている。この意識のちがいが親子の間のギャップを生み出しているように感じた」(116ページ)，と。親たちと子供たちのいずれが，共生の人間関係をになえる意識だろうか。多くを語る必要はないだろう。

先ほど，江川さんを“とてもうれしくさせた”中井くんの発言のいくつかを紹介しておくことも意味があろう。

• 中井正輝(大阪・中3)　ぼくも生徒会の副会長として，毎朝校門で『おはようございます』ってあいさつしていますけど，本当に遅刻をなくすためにやっています。

• 江川　中井くんは，点数は全然気にしないでその役をやっているわけ？

• 中井　はい。遅刻がなくなって，みんながよくなっていけばいいな，と。みんなを頑張らせて，結果を出して，それにはまず自分が頑張っていこうと思って立候補したんです。

• 斉藤　おれは中井くんと同じ学校なんやけど，遅刻がむっちゃ多いやんか。ほんでな，『おはよう』も何も言わんのや。だから，中井くんらが一所懸命に『おはようございます。おはようございます。』ってあいさつしている。これは，自分らが決めたことで，先生が言うたことちゃうねん。

だから，すごいなと思う。

• 中井　ぼくもせっかく頑張ったのに，いろいろ言われたりすること，よくあります。あいつまじめだから，自分と違うからと思われて，友だちが離れていく。

• 斉藤　中井くんは，おれと違って学校ではみんなにまじめと思われている。だから「あいつはまじめや」って言うんやけど，なんでまじめと言われんのが嫌いなん？

• 中井　なんか嫌や……。

• 中井「誰がどう思っていようが構わない」という言葉には，「別にほっていて」という意味があるじゃないですか。それが嫌なんです。もちろんぼくにも友だちがいますけど，それだけで満足しているようでは楽しくないから，いろいろな友だちを作りたいと思って。

• 江川　例えば，どういう友だちがほしいの？

• 中井　みんなで頑張っていこうと思えるような，人生の連れみたいな友だち。だから，出会った人とはだいたい友だちになりたいと思う。みんなが一緒に頑張ろうと思えるっていうか，思ってない人も思わせられるようになれればいい。

この中井くんたちの引率者で，座談会を聞いていた土田光子先生（大阪府八尾市立桂中学校教諭）の感想文の一部を紹介してここでの仕事を終わろう。

「ＮＨＫから，『学校や教師に対する子どもの思いを取材したい』と頼まれた。そこで，生徒が10人ほど集まり井戸端会議を始めた。私を始め教師は会議には入らなかったので，どんな話が出たのかは知らないが，一時間後にのぞきにいくと，彼らの『学校・教師編』への出演が決まっていた。まあ，やつらのことだから，テレビでも本音を包み隠さずのびのびと語るに違いない。ＮＨＫの担当者から，『当日もそのまんま言いたいことをしゃ

べればいい』と言われたが，ヤツらは，ただ東京に行けるとはしやいでいた。指定された日に都合のついた4人が出かけることになった。しかし，どんな主張を展開しようかと思い悩む者は一人もいない。夕食はなんだろう，ホテルはきれいだろうかと，微笑ましくもそんなことにしか興味がない。そして周囲の大人もまた，もののみごとに同じ発想だ。……ヤツらは『いなかもの』である。決して場慣れているわけでも，語り慣れているわけでもない。当然，テレビに出たことなど一度もない。けれどもヤツらはおじけづかない。ものおじしない。ヤツらは『語れば思いは通じる』という文化の中で生きてきた子どもたちである。不平・不満も怒りや悲しみも，思うことはその都度きちんと訴えていけば，必ずその気持ちは受け止めてもらえるものだと信じている。そんな文化の中で育ったヤツらは，根本的に人間が好きである。人間を信じている。だから，準備などいらないのだ。……うちのヤツらも当然，学校や教師に言いたいことをいっぱい抱いている。そしてそれは，学校や教師に対する期待をうしなっていないからこその思いである。『学校・教師編』の収録中，繰り返し何度も『考えが甘い』『甘ったれたことを言うな』と，東の子らに指摘されてもなお，ヤツらは人間としてお互いに分かり合いたいと心から願っていた。だから，分かり合えないことにいら立ってしまうのだ。だが，ヤツらは相手が分かってくれるのをじっと待ってはいない。自分では動かずに，不満だけ言っているのではない。学校の主役は，自分たちだと信じている。だから，気に入らないことは訴えて変えていけばいいと思っているし，お互いの思いをぶつけ合わない限り，人間は分かり合えないと思っているのだ。ヤツらの訴えは人間的連帯づくりのためであり，その渦中から身を引いて評論家の立場をとることを否定する。人間が分かり合うという，厳粛で最も難しい関係づくりから，決して降りたりはしない。ヤツらは人を信じ，人が好きだから語るのだ。東の子らに共通してみられた根深い人間不信とは好対照

なほど，ヤツらはあっけらかんと人間が好きなのだ。この差はどこからくるのだろうか」，と（前掲書，210～212ページ参照））。

少年・少女たちの本音，＜内なる声＞をよく聞き取れば，彼らの“交わり欲求”の強さと彼らの“居場所”探しの欲求の有り様と“居場所”づくりの現状の一端が窺い知れるだろう。

4．対話し，支え合う「共生社会」へのいくつかの課題
――“居場所”探し・“居場所”づくりに視点をすえて――

神戸の少年Ａの事件の舞台となった，ニュータウンは，「障害をもつている人と障害を持たない人が共に暮らす“共生の街”として知られていた場所」（産経新聞大阪本社編集局，『命の重さ取材して……神戸・児童連続殺傷事件』第２部，３章ニュータウン参照）ということである。この地域での「人と人とが，それぞれのの主体性と立場のもとに，支え合い，かかわり合いながら生きる関係」（山本勝美『共生へ』，217ページ）のあり方やその発展の課題などを検討してみることで，「共生社会」づくりの教訓や課題を学び取るのが，ここでの仕事である。

地域の特徴を，『暗い森』（朝日新聞社）で描いてみると，つぎのようになる。

「神戸市須磨区友が丘地区は，須磨ニュータウンのほぼ真ん中に位置している。兵庫県労働者住宅生協が事業主となって開発し，1967年から入居が始まった。約２千百世帯，7千人が住んでいる。そのほぼ三分の二は，一部上場の大手企業4社に務めている社員の家庭である。教育熱心な家庭も多く，主婦の一人は，近所に住む大学生たちがどの大学に通っているのかをそらんじてみせた。『あそこの子は京大。あの子は高校中退。立ち直ったけど，結局四流大学』。こうした環境について，『街全体が社宅のような

もので，子供がどこの高校，大学にはいるのかを競っている』と話す人もいる。中学生がバイクの後ろに乗っていたこと，放課後にけんかをしたことなどが，学校への匿名の電話ですぐに教師に伝わって注意されるほどで，『地域全体から監視されている雰囲気だ』という声もある。丘陵地を切り開いただけで何の施設もなっかたところに，バス路線や生協の店舗を誘致し，街をかたちづくってきた。その自負がある住民たちの組織力は強く，地元の北須磨団地自治会は，学校法人や社会福祉法人を設立して，保育園，幼稚園，特別養護老人ホームまで経営している」(朝日新聞大阪社会部編『暗い森――神戸連続殺傷事件』，朝日新聞社，60～61ページ，参照)。

高山文彦の『地獄の季節』（新潮社）によると，この北須磨団地は，「勤労者に住宅を」のかけ声のもと，兵庫労働金庫が創立15周年を記念して着手した，日本最大の労働者団地（高度経済成長期に労働運動がひとつの成果として作り上げた団地）で，いまの時代になっても個人商店はなく，2軒のコープしかない。コンビニエンス・ストアもなければ，喫茶店もない，酒場もない，そば屋も寿司屋もない。ひとが住むためだけの建物が，整然と並んでいるだけだ。どのニュータウンもそうであるように，このまちでも働く男たちの姿はほとんど見られない。男たちは家を出て電車に乗り，海そばの都市部の会社へ行き，働いて帰ってくる団地。よそ者がゆっくりとくつろげる場所はこの街にはない。論理的に構築された街，大金持ちも貧乏人もいない街。スローガンを打ち立て，ひとつのコミューンであろうとしてみたところで，働く場所のないこの街のなかでは，たとえばいなかの田植えのように，隣近所いっしょになって汗を流すようなことなどありえないのだから，スローガンはどこまでいっても血肉化されるはずはなかった」と言っている（『地獄の季節』，第2章　警察のない街，40ページ-58ページ参照)。

『命の重さを取材して……神戸・児童連続殺傷事件』（前掲書）は，

「耳に心地よい『共生社会』という言葉が一人歩きしている中，このニュータウンはそれを実現している数少ない街として知られている」と記し，つぎのようなに書いている。

近くの西神ニュータンで，神戸市からの依頼で知的障害者の相談員をしている女性，彼女自身，知的障害を持つ子供がおり，市内の知的障害者の親で作る会の一員でもあるが，その女性を訪ね，話を聞いてきている。「昭和40年頃，現場のニュータウンの住民主導の福祉活動には，目を見張る物がありました」，「なんて革新的な街だろう，と神戸市内の障害を持つ子の親は感心し，注目していたのです」と。

このニュータウンの存在に，勇気づけられた知的障害者の家族は多かったという。

「前に住んでいた所は好奇の目で見られ，親子とも片身の狭い思いをしていました。でも，ここへ来てからは同じような障害を持った人たちが街へ出て生活している。私たちもやっと，地域社会の中にとけ込めたんです」，と知的障害を持つ25歳の長男の帰りをバス停で待っていた母親の話を載せている。

また，地元の知的障害者通所授産施設「神戸聖生園」園長，小森宏さん(66)とのインタビューで，「優秀な者だけが存在感を持つ社会にも責任があるのでは……」と少年Aの犯行に社会全体の歪みを重ね合わせながら，「彼をそこまで追い込んだ社会にこそ，病んだ部分があるのではないか」と自問する小森さんの姿を伝え，そして，言葉を選びながら「学校教育の批判はしたくないが……人間は能力や効率だけで評価できない。弱者の人権を認める教育ができないだろうか。この街を健常者も障害者も，大人も子供も尊重して助け合う，今まで以上に優しく温かい街にしていきたい」と，小森さんが語ったことを伝えている（前掲書，第3章　ニュータウン参照)。

このように見てくると，この団地形成の歴史からしても，地域住民の構成からしても，“街全体が社宅”のような地域で，しかも“教育熱心で監視されているような雰囲気”のまなざしのなかで，「共生の街」のあり方やその課題について検討していくことは，まさに「日本型企業中心社会」のもとでの「共生社会」のづくりのあり方や課題を具体性を帯びた形で検討することになると考えている。

野口弁護士が，“少年Aの親や周囲の人々が，少年Aに受験競争を勝ち抜いて生きる以外にも，すてきな生き方があると教えてやることできれば，まったく違った少年Aに育っていたかも知れない”と語っていたが，私もまさにそうだと思えて仕方がない。この点の検討から始めよう。

この地域には障害をもつ人々の施設がいくつもあり，障害を持つ人びと地域住民との交流も行われていたということで，この交流が，少年Aの親やその周囲に人々に，“もう一つの人生”“もう一つの道”があるということをもっとよく見えるような形で展開されていたらと，残念でならない。

少年A事件をきっかけに「もうひとつの道」の取材に取り組んだ横川和夫は，子どもたちの諸問題が続発する事態を自分のあり方の問題として真正面から受け止め，どうしたら現在の閉塞状況をうち破ることができるのか，一人ひとりが考え，改めるところは改め，行動に移す実践の時代に入ったと考え，全国各地でユニークな教育や保育の実践に取り組みながら「もうひとつの道」を模索している人びとを訪ね歩いている。そのルポルタージュが『もうひとつの道……競争から共生へ』（共同通信社）である。

この書物には，障害をもつ人たちの人間的優しさに学びながら，共に生きていこうという各地の動きが報告されている。私はここでの議論に引きつけて，北海道浦河町にある精神分裂病など障害を抱えた人たちの活動拠点「べてるの家」と地域・地域住民との関わりを紹介する。

• 「べてるの家」では，「安心してさぼれる会社づくり」「利益のないと

ころをたいせつに」をモットーに，人間らしい生活を送っている。昆布の加工だけでなく，看護用品の販売，病院やスーパーの清掃をする有限会社を軌道にのせ，売上高年間7千万円にも達したという話を聞いた（前掲書，172ページ）。

• 「べてるの家」のメンバーたちを街の人々が受けいれはじめたのは，べてるが外に向かって積極的に情報公開したからだ。8年まへに「こころの集い」を開催したころから，べてるではマイナスをプラスにする転換の発想が定着してきた。向谷地生良さんは，当時を振り返る。「昆布の仕事が軌道に乗って，取引先の人から「なにやってるの，べてるは？」といった声がでてきた。そこで街の人たちと『こころの集い』を開いたときに，思い切って『偏見差別大歓迎集会』と銘打ってみたんです」

集まった街の人たちをまえにメンバーたちは「精神分裂病の○○です。日ごろみなさんにご迷惑をかけています」「入院をくりかえしている○○です」といったぐあいに，みな実名をだして自己紹介しました。「そしたら町の人たちも『じつはここに来るまで，べてるの人は怖かった』と言ってくれたり……。私たちも偏見？　ああ，あたりまえですよ。差別？最初は，みな，そうですよ。じつは病気をした私たちも病気には誤解と偏見を感じて，慣れるまでは時間がかかりましたよ，といったやりとりができるようになったんです」（前掲書，185ページ，186ページ）。

• 「べてるの家」を取材して，マスコミをはじめ健常者と思っている私たちが，精神障害を持った人たちをいかに偏見の目で見，差別してきたかを痛感させられた。その結果，障害を持った人たちは，さらに追いつめられていく。会社や学校でのいじめの構造も同じではないだろうか。べてるのメンバーたちが問題を積極的に情報公開して行くなかで，浦河町では精神障害にたいする見方や受けとめ方が変わってきた。彼等の行動に関心を示す人びとが増えるのと並行するように，メンバー自身も，病気を受けい

れられるようになっていく。町の人びとは役に立つか，仕事ができるかという視点で人の価値をはかるのではなく，存在することに意味があるという人間らしい視点，生活感覚をよみがえらせている。浦河の小，中学校では，問題を起こす子どもや親を叱責，排除せずに，彼らの立場にも配慮しながら，ありのままを受け入れていく優しさが芽生えつつある，という」（同上195，196ページ）。

労働者団地という，企業の価値や企業の能率主義や効率主義が身に染みついた人びとが集住する地域で，健常者と障害を持つ人との交流が発展し，ここの住民に，“もうひとつの生き方”があることがよく見えるようになり，いままでの生き方に疑問を感じ，生き方を見直しはじめるようになるには，大変な葛藤や努力が必要だし，時には周囲との大きな摩擦がおこることもあるだろうが，いずれにしろ，かなりの時間がかかるものであるように思えてならない。この地域は，そのことを考えてみる格好の場所でもある。

このことに論を進めよう。

さきほどの三つの書物で描かれている限りでしか，私はここの地域については知らない。そこに書かれている地域特性からみると，“明日の労働力を最も効率的に，能率よく再生産する”という観点からみて，少年Aが住んでいた地域は論理的に考え抜かれたよくできた地域であると，言えるのだろう。

その意味から，生活に必要なものを一つづつ整備してきたここでの“まちづくり”には，多くの労力と時間を住民は割いてきたのだろうと推察される。そのことをが住民に自負と組織力と連帯も生み出してきたのだろう。

そのような意味で，ここのまちづくりは，昭和40年代の，高度成長期のよくできた模範的な地域づくりのひとつだったと言えるのだろう。

しかしながら，地域は生命（いのち）の再生産の場所であり，子どもたちの成長・発達の場所であり，人びとの“生活世界”の再生産の場所でも

あるという視点で，いまいちど，この地域を見直すとき，地域住民の地域における“居場所”の問題が問題とされざるをえなくなる。

また，“居場所”の問題やその必要性が社会や大人に目に見えるような形で提起されてきたのは，社会が“学校化社会化”し，学校に行くことを“拒否”したり，学校に行かない子どもたちが相当数登場した頃からであろうが，最近の子どもたちが引き起こす悲惨な問題や深刻な問題は，子どもたちの“居場所”の問題が切実で，緊急な問題になってきていることを私たちに痛感させるものであろう。このように，まちづくりの理論の観点からも現実的な視点からも，まちづくりが今また，新たな視点から問い直されるようになってきている現時点では，ここのまちでくりも厳しく検討され直されざるをえないと，言えよう。

学校にも家庭にも自分の“居場所”を見つけだせなかった少年Aが，“物理的”にも“ただのおしゃべりのためのたまり場”さえも，地域に探し出せず，そして“学校化された地域”，大人のまなざしをいつもいつもひしひしと感じる地域で“心の居場所”はなおさら探し出せなかったことは容易に推測される。そして，自分の“居場所”を幻想の世界に求めざる得なかった人生を，少年Aの事件に見るのだとすれば，また，少年Aの「透明な存在」に少なくない同年代の少年たちが共感を表明している事実（毎日新聞大阪本社編集局『少年……神戸からの報告』，毎日新聞社）や少年・少女たちのコミュニケーション欲求の強さを認めるのであれば，彼らの“たまり場”づくり，“居場所”づくりは緊急の課題のように思われてならない。

つぎに私が考えている“居場所”が持つ意義について，山本の『共生へ』（前掲書）からの少し長くなる引用をしながら，考えてみることにする。

「はじめのころは20人ぐらいのお母さんたちが集まっていたが，入学しておちついてからは姿を見せなくなった人もいて，何年を続けているうちに結局10名ぐらいの常連メンバーなっていった。でも，その人たちにとっ

ては月１回のただのおしゃべりの会が，とても貴重な場になっていった。地区のふつう小学校に通学し続けるのは，順調にやってゆける時もあるけれども，担任が代わって態度が一変してしまうこともよくある。校長の人柄や考え方も大きく左右する。そんな不安定な環境の中で，親子が小学校と中学校の９年間をふつうクラスにこだわり続けるということは，決してたやすくはないのだ。そこで，たんぽぽ会のつながりが，そして多分それだけが，ほとんど唯一のささえとなってきた。

集まりは，特に，会としての方針を決めたり，学校にみんなで交渉に行くといったことはほとんどない。……あつまっておしゃべりして，をくりかえした。……かってはボクも，おしゃべりだけやっていてよいのか，これでは会が発展しない，といったあせりから，ときどき方針を提案してみたが，どうにも様にならない。けれども何年か続けてゆくうちに，やがてこのぐちみたいな話し合いが，お母さんたちにとってはとても大切なことで，おおきな力となるのだということに気づいた。

それは，ぼく自身が職場のごたごたで，夜も眠れないくらい悩んだときの体験から目を開かれた。そのとき友だちに話を聞いてもらうことで元気を取り戻し，そのおかげで結局自分の力で解決できたのだ。……気がつくと，結局のところ当のお母さんたちが，子どもと友に自力で乗り越えている。何かできたとすれば，みんなで話を聞いて『ふーん大変だね』と同情したり，『ひどいはね』と学校側の態度に一緒になって怒こってみたり，しいて言えばそんな共感関係だけは深まっていったと思う。はじめのうち，ぼくには「男」のセンスではなかなかついてゆけなかったが，やがて『ぐちは力なり』ということらしいと思えるようになった」(前掲書,『共生へ』，171，172ページ)。

考えておきたい，つぎの点に論を進めよう

会社の論理・会社で重んじられる能率・効率と生活者，特に障害を持つ

人たちの価値観や能率・効率とはそのままでは両立し難たいほどの距離を感じることが屡々あるだろう。その時に，健常者が自分の身に染み込んでいる生活のリズムとテンポのレベルから価値観や論理のレベルまでを反省し，また，それとは質をことにする価値や論理を発見し，自分が生きていく上でもその価値と論理が大切なものであると身体で理解することが，言葉の正確な意味での，健常者と障害を持つ人たちとの交流であるのだから，人々の成長・発達という観点で見ると，それは飛躍的な発達ということになるし，生き方が大きく変わるほどの成長ということになるのだから，かなりの時間と意識的な努力を必要とするのは当然のことだろう。

こう考えると，健常者と障害を持つ人々との交流は健常者が障害を持つ人々を支援しながらともに生きるという意味での交流は，障害を持つ人にとっては，確かに有り難いことであるが，しかし，すこし立ち止まって深く考えてみれば見えてくるように，そのことは健常者たちにとっても掛け替えのないほど有り難いことであるということであろう。まさに相利共生ということであろう。

北須磨団地の「共生の街」づくりが，少年A事件を契機にして，小森宏さんが言うように，「この街が健常者も障害を持つ人も，大人も子供も尊重し合って，これまで以上に優しく温かい街」を作り上げられるのかどうかが，この地域の「共生社会」のまちづくりに期待されると考えている。

そのような観点から，ここでの議論を一層深め，豊かにするのに役立つと私が考えている，つぎの文献の内容に少し深くふれながら，紹介しておきたい。

これも，さきほどの山本勝美の『共生へ……障害をもつ仲間との30年』（前掲書）からである。

この書物は，「（今日の）こうした時代の変化の中で，社会にはいま，『障害をもつ人たちのことに関心がもてるようになってきた』『なにかて

きとうな読み物はないか』，あるいは『チャンスがあれば交流したい』，と思う一方で『でもまだ距離感を感じる』，といった思いの方々がやや少なくないだろうと思う。そんな方々のために，ぼくがどこまでお役に立つかは，はなはだ心許ないが，自分自身の経験をもとに，障害をもたない者が障害をもつ子どもや大人と出会い，友だち，仲間になってゆく過程はどんなものか，どんなかかわり合いや世界が開けていくのか，またどんな共感が生まれ，葛藤が生じるか，といったいろいろな面について，障害をもたない者の側からの体験に基づいて具体的に描いてみること，そんな試みが，障害をもつ人たちとの距離を縮める上での一助になれば，という願いをいだくようになって」（はしがき，vi）書かれたものである。

本稿での問題意識に引きつけて，私が痛く感銘を受けている箇所をいくつか引用して，この書物の内容紹介に代える。

「ぼくと彼の関係が介護者の中で，18年間という，もっとも長期間にわたったことは事実だ。そしてかかわり合いも，はじめの利用し合う関係から，次第に深いところまで個人的なことを語り合える，いや正確には，彼のプライバシーをぼくが聞く関係になっていった。けれどもぼくはいつも彼の内側に壁を感じていた。……彼のことを，今ではなつかしさもこめて人に，“友だち”ということばで語っている。でも，彼を，たがいに心を共にし合う関係としての“友だち”と感じたことはなかったのではないか。友だちというには，お互いのかかわり合いの実態にあまりにもズレがあったと思う。そして彼は当事者，ぼくは介護者という関係に終始したと言わざるを得ない。ぼくは彼からいろいろ学んだ。ぼくだけでなくほかの介護者にとっても，彼は精神的な拠り所になっていたようだ。でもやはり，ぼくにとって日常的な友だちづき合いにはなっていなかったと思う」。「また彼とのつき合いでは，自分が『健常者』であって同じ立場にはなれないという冷厳な現実をつきつけられながら向かい合っていたように思う。す

くなくともぼくはそういう気持ちをいつもどこかにいだいていた。だから同じく仲間，友人とはいっても，それは，決定的な立場のちがいをきちんと踏まえながら，しかも“良き理解者”になろうと努めてきたことにようやく気づいてきた。彼との間にも，長年のつき合いで違和感や疎遠な距離感といったものはほとんど消え，親しみ，気持ちのかよい合いを感じてきた。けれども，どれほど近づこうと，現実社会の中でおかれた立場の違いは厳然としてあり，それをふまえたうえでのかかわり合いにならざるをえなかった」，「こうして過ぎた日々をふり返ってみると，少しずつ介護者としての役割，気持ちに慣れていった自分が思い出されてくる。そうして一方では，障害をもつ仲間の生活ペースに自分を合わせることができるようになった介護者としてのぼく，そのぼくが自分の生活に戻るや，『健常者ペース』で再び活動する。こうして長い年数の間にそんな二つの世界を行き来できる“器用な通い人”になってしまったらしい。でも『共生』とはこんな不連続なかかわり合いのことではないだろう。ぼく自身の“器用”さのおかげで自分にさえも問題がみえなくなりがちだが，でもこれはやはり，まだまだ障害をもつ人の『完全参加』が実現できていない地域の現状が大きな壁をつくっているのだと思う」(前掲書，106～109ページ参照)。

人が対話し，支え合う「共生社会」づくりの姿が抽象的でなく，具体的に目に見える形で描かれている。私にはこれ以上なにも加えることはない。

これまでの議論から明らかになってきているように，わが国での“共生社会のづくり”は，日本の「企業中心社会」の動向に密接に連動し，地域住民が抱え込まされる企業倒産や失業の問題とどのようう取り組むのかとか，人々が生活の中での“閉塞感”にどのように立ち向かうのか，日常生活の中での人と人との交流が自己承認・自己実現・自己確認をどの程度実現できるのか，一言で言えば，社会の閉塞感の強まりと国民的規模での“居

場所”探し・“居場所”づくりの模索と“共生社会”づくりの前進は密接に連動するように思われる（長尾「<人が対話し，支え合う共生社会>をめざして——研究ノート(1)，横浜市立大学論叢，第48巻　社会科学系列第1号，参照)。